



創立者・岸本 辰雄



創立者・宮城 浩蔵



創立者・矢代 操

## 建学の精神『権利自由』『独立自治』を問う

《建学の精神》について書いてほしいとの編集子からの注文である。私はそれを書ける任だとは考えていない。何故なら大学創立の理念は創立者のもつ思想体系を知り、その行動の軌跡をさぐり得ずして理解することは出来ないからである。創立者のいった一言半句をとらえてそれをもって事足りるといったものではないからである。創立者すら知らずして、何で建学の精神であるのかと思う。本当に『独立・自治・質実剛健』が明治大学のモットーであり、『バック・ボーン』(学生便覧一九七四年版)であるのだろうか。

私は《建学の精神》の一端でも知ってもらいたいと思って、昨年歴史編纂資料室で『岸本辰雄関係史料集(一)』を刊行したのである。

我々が常に口にする“大学の伝統”ということ一つを考えてみても、一体何が伝統なのか、何が我々をして受けつがねばならないのかが問題であろう。

明治大学創立の明治十年代は我が国近代の出発点として重要な位置を占めている。明治政府の上からの資本主義化と、それに対応する下からの近代化の途である。その一つに自由民権運動の展開もあがられよう。その渦中より生まれてきたのが明治法律学校をはじめとする私立の法律学校であったのである。そして、それらを生み出す条件となったのは刑法及び治罪法の発布と、それにとりまう近代法体系の樹立が社会全般に大きな規制力をもつに至ったからである。「夫し法律ノ管スル所ハ」に始まる明大創立の趣旨はそれを明確にうたいあげている。「(法律)八大二シテハ社会ノ構成ナリ政府ノ組織ナリ、之ヲ小二シテハ人々各自ノ権利自由ナリ、凡ソ邦国ノ榮譽人類ノ命脈此学ニ係ラザルナシ」と記されている。

だからこそ「公衆共同シ大ニ法理ヲ講究シ其真諦ヲ拡張セン」として、その場を明治法律学校の創設に求めたのである。だがその精神が如実に継承されたのかが問題であろう。その主旨が立派であればあるだけに、その精神の具現化こそが真の伝統を作るものになるのではないだろうか。その明治法律学校を通して地方に散った《草の根》こそが明治法律学校の伝統の地下水となったのであり、それこそ我々がくみとるべき何ものかを持っていると考えるのである。(Y・M)

明治大学学園だより第31号(1974年6月1日発行)『めいだい歴史たん訪』より転載



# スポット明治

1881(明治14年)に創設された明治法律学校から140余年。

明治大学の歴史をひもとくと見えてくる

さまざまなエピソードを一部紹介します

## 紫紺の由来

秋もたけなわの頃、東京六大学野球秋のリーグ戦が始まる。

今年はどうも戦況がかんばしくはないが、澄んだ秋空のもとで白球を追う姿はいつ見てもよいものである。野球の試合といえば、ゲーム前お互いにエールの交歓にスクールカラーを染抜いた応援旗が交互するのも楽しいものである。

明大のスクールカラー《紫紺》は六大学の中でもひとときわ落ち着いた色あいかもし出している。

制服を着なくなった学生が多い中でも、スクールカラーを模したセーターなどを着る若者たちを時折大学キャンパス内で見かけることがある。

しかし、どうして《紫紺》が明大のスクールカラーとなったのかを知る人は少なくなった。

正式には大正4年4月、本学の校旗が制定されたときにはじまっている。時の学長木下友三郎先生のとき決められたものである。

先生は「色階の最上位は深紫です。延喜式に抛りますと袍の色にも段階がありまして、天子の御衣は黄燼染として黄に樺のかかったもので、其の他は紫、緋、緑、縹の順位があり、即ち深紫は1位、浅紫は2位、深緋は3位、浅緋は4位、ついで深緑、浅緑、深縹の順で緋は4位以下の色であり、下級の公家を嘲笑して5位の赤蜻蛉などといわれていたもので、私には好感



がもてなくて、それ故向上の意味を写して深紫を採用したわけだ」と語っている。(駿台新報、昭和14年10月17日)

何となく出すぎたきらいがないでもない。かつてスクールカラーの由来を調べているときに、当時(明治中期頃)までは駿河台あたりにも野の花が咲き乱れており中でも一さき露草の紫草がさわだっていた。それ故、明大のカラーを《紫紺》にしたのだと聞いた事がありますと古老の人が話してくれたことがある。何だか作り話めくのだが、どうもこちらの方が素朴で似合うように感じる。(Y・M)

明治大学学園だより第4号(1971年10月1日発行)『大学史おぼえ集3』より転載



## “白雲なびく駿河台”校歌誕生秘話

大正9年当時隅田川で行われた大学の漕艇レースは現在にみる六大学野球に似て全学熱狂的な対校試合であった。校歌作成の動機はこのスライディング式による第1回の対校競漕に歌う歌を必要としたことである。校歌作成の動機は学生大会において可決され、その歌をもって校歌とする約束を大学側からもとりつけた。武田孟(元総長)・牛尾哲造両氏が使者となり社会主義詩人であった児玉花外、そして欧州帰りの新進作曲家山田耕筰を説き伏せて出来たのが白雲なびくの校歌である。歌詩は現在と若干異なっているが、しかし、校歌は時代と共に学生と共に歌いやすい様に変わっていったのであろう。